



短期
集中連載

第3回

市立新居浜商業高校 甲子園 準優勝の軌跡 ～ 50年前、一番暑かった新居浜の夏 ～

お家芸「ラッキー6」初出場での決勝進出

今から50年前、1975年(昭和50年)開催の「第57回全国高校野球選手権大会」いわゆる「夏の甲子園」で、新居浜商業高校が初出場で準優勝を成し遂げた。その快挙は市民に感動と勇気をもたらし、それまで「アライハマ」と呼ばれていた「**新居浜**」の名が、全国に知れわたる出来事となった…。

三国(福井)を破り、ベスト8進出の新商。しかし台風5号の影響で3日間の中断。新聞の見出しは「恵みの雨か、恨みの雨か…」。試合の無い3日間、各紙には後半戦の展望記事が掲載。優勝候補筆頭は原辰徳率いる「東海大相模」、そして「広島商」「中京商」「天理」と続く。そこに「新居浜商」の名は無かった。

そんな中、鴨田監督は「無欲ほど強いものはない」とのコメント。初出場でただ一校勝ち残っている新商。「勝負は時の運よね…」と鴨田は締め括った。

8月20日、準々決勝第3戦の相手は、強豪の天理(奈良)。天理は2回戦の堀越戦、3回戦の浜松商戦、ともに9得点と猛打をふるったチーム。しかし、この試合は新商が試合巧者ぶりを発揮。2回表、竹場の三塁打で勢いに

乗り、続く岡本の安打で1点先取。3回にも野口の三塁打、大麻の二塁打で1点。5回にも大麻の適時打で1点。6回にも2点を加えて計5点。投手村上は天理打線を内野ゴロ15本に打ち取る好投。6回裏には1点を返されたが、4安打1点に押さえ5-1で新商の完勝。初出場でベスト4に進出した。

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計
新居浜商	0	1	1	0	1	2	0	0	0	5
天理	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1

応援席には新居浜から「泉池こども会スポーツ少年団」の姿も。当時、新居浜市内にソフトボールのスポーツ少年団は84チームあったという。新商ナインのほとんどは新居浜市内の出身。(二塁手・大麻は川之江)広い裾野も新商の強さの秘密だったのかもしれない。

この連載は平成31年2月～令和元年7月、「神郷公民館だより」に掲載された連載(執筆:渡部 強氏)に編集部が加筆・修正したものです。 ※文中敬称略

翌21日は準決勝2試合「習志野一広島商」「新居浜商一上尾」のカード。準決勝第1戦は、習志野が広島商を4-0で破り決勝戦に駒を進める。

準決勝第2戦、新居浜商の先発・片岡は二者連続四球ですぐに村上に交代。しかし攻めたてられ初回到3点を先取される。上尾のエース・今(こん)は新商打線を五回まで2安打散発、無四球と寄せつけない。さらに上尾には、前日優勝候補の最右翼・東海大相模に勝った勢いもある。強豪・上尾の「横綱相撲か?」そんな思いにスタンドがとらわれかけた五回、激しい通り雨。幸い雨はすぐ上がり夕陽で紅く染まる甲子園。照明の点灯と共に新商の猛反撃が始まる。六回表一死後、1番野口、2番大麻が連打、3番村上の三塁打で2人が生還。4番続木も三塁線を破り、村上が帰還してあっという間の同点。5番竹場も安打、続く岡本も三遊間を抜く6連打目で、続木が勝ち越しの本塁生還。7番片岡の打球はショート失策で竹場が生還、2点のリードに。追いつかれた上尾も反撃。六回裏1点を加え、七回裏には一死満塁のチャンス。しかし、村上の冷静な投球で無得点に抑えた。そして八回表、先頭打

者・竹場が初球を左翼ラッキーゾーンへ値千金のホームラン。またしても2点差と突き放す。その裏1点を取られるが、村上が必死の力投。6-5で新商が逃げ切った勝利となった。

一塁側アルプススタンド、3,500人の応援団は沸きに沸き「ソーリャ!ソーリャ!」の大声援が夜の甲子園の銀傘に響く。翌日、新聞の見出しには「**新商お家芸ラッキー6に猛打**」の文字が踊った。

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計
新居浜商	0	0	0	0	0	5	0	1	0	6
上尾	3	0	0	0	0	1	0	1	0	5

決勝戦は翌日22日、新居浜商 一 習志野。しかし、またしても台風に襲われ、決勝戦は8月24日まで延期されることとなる。(以下次号)



決勝進出時の新聞スクラップ。左ページ見出しの「小川川」は、大会屈指の投手、習志野・小川淳司。小川は後に東京ヤクルトスワローズの監督も務めた。